

被災地ボランティア活動報告

自然を愛する会の新燃岳灰降ろしボランティアおよび、東日本大震災の支援ボランティアに JOC の学生リーダーからも参加しました。参加した学生リーダーの感想です。

灰降ろしボランティアに参加して

熊本大学 3年 西川菜摘

3月10日、宮崎県の都城市で、屋根から火山灰を除去するボランティア活動に参加させていただきました。屋根には想像していたよりもたくさんの火山灰が積もっていて、鹿児島島の火山が噴火したのに、隣の県にこんなに積もるのか!とびっくり。実際に登って灰を降ろすと、最初は火山灰が少なく簡単に感じたけど、下の方に行けばいくほど量が多くなり疲れました。1軒の屋根から火山灰を降ろすのに、10人以上の大人が頑張っても降ろしてしまうのに2時間半、屋根から降ろした灰の量は軽トラック4台分。本当に大変でした。20歳そこそこの私が、火山灰を見る・触るなんてなかなかできないこと。屋根の上に登って灰を降ろすことも普通に大学生をしていたら、絶対にしなかったなと思います。灰まみれになることもきっとないでしょう。とても大変だったけど、みんなで灰まみれになって掃除したことは貴重な体験になりました。

東日本大震災支援に参加して

熊本大学 4年 西田晴美

まず、はじめに自然を愛する会の一員として今回の支援に参加する機会を頂き、貴重な経験をさせて頂いたことに、阿南さんをはじめとして、今回参加された人生の大先輩のみなさん、自然を愛する会の会員の皆様に心から感謝を申し上げます。

実際に現地を視察させて頂き、感じたのは大きな大きな悲しみでした。生活が流され、思い出が流され、人の命も流され、言葉では表せない、時間が経ったとしても受け止めきれないのではないかなと思うような大きな悲しみがありました。このがれきの下にまだ人がいるのではないかと、3週間たったのにまだこんなにも酷い状況なのか、私はバスに乗って被災した地域を通り過ぎるだけで目をそらすことが出来るけれど、毎日目の当たりにしなければいけない方々はどのような思いをしなければならないかなと思うと心が痛かったです。

今回の視察を終え、熊本からの支援をどうすべきかと考えた時に、現実的に熊本から東北まで往復何キロもの道のりを行かなければならず、交通費や食費、宿泊先、現地の受け入れ態勢など支援するにあたっての問題は多くあります。目的やあてもなく、現地に興味本位で入っていくことは、被災した方々にとっても良いことではありません。しかし、今回、何キロも何キロも津波の被害にあって壊滅的な居住地を見て、見ているだけ、考えているだけでは何もかわらない。多くの支援を必要としていると感じました。そして、流された家は何年か経つと元に戻るかもしれないけれど、形は元に戻っても元には戻ることのできない思いがたくさんあるのではないかと感じました。避難所に伺った時、町の職員の方が「こんな遠いところから支援に来て頂いて…」と涙を流されたのが目に焼きつきました。復興のためのお金は大切ですが、人のこころを癒すことができるのもまた人なのではないか、そう感じました。

大学生である私は、社会人の方々のように、誰かの役に立つような技術や知識を持っておらず、自分は本当に微力だと感じます。しかし、微力を悲観することはせず、自分の周りから支援の輪が広がるように出来る事をこつこつと行っていきたいと思いました。まずは、私の思いや痛みを同じように感じてくれる家族や友人に今回目にしたことを伝えていきたい。聞いて、感じて、動く人を自分の周りから少しでも広がればよいと考えています。

また、今回は自然を愛する会のメンバーとして参加させて頂きましたが、実際目にしたのは自然の波に飲み込まれた人間の生活でした。しかし、被災地を視察しているとき、空には虹が見え、海は穏やかで、太陽は沈み、やはり自然は癒やしや希望、生きる力を与えてくれるものだと感じました。自然と人間の共存とはなにか、文明の進歩、科学の進歩とは何か、何のために生きるのか、どのような人生を歩むべきなのか考える大きなきっかけにもなりました。

本当に貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。